

『夜明け (08/07)』

夜明けに流れる  
私の涙よ  
胸の痛みか  
消(き)ええぬ思いか  
頬を伝わり  
落ちていく

何がそんなに  
悲しいのか  
何がそんなに  
痛むのか  
お前だけが  
泣いている

零れた涙が  
流れ落ち  
胸のやるせの  
哀れなる  
泣いて流す  
夜明けの夢か

『午後 (08/07)』

遠く野畑の広がり続き  
その果ての緑が山々の連なり  
空は高く青く澄み  
白雲すらも浮かんでいない

ああああこの長閑さよ  
ああああこの込み上げる心よ  
ああああ生きている喜びよ  
ああああこの安らぎよ

樹々の海原はけだるく  
太陽は真上でギラギラと燃え  
己(おの)が生きている苦惱が  
目覚めて怒涛のごとく呵責に責める

死はいづくにぞ有る  
自己の命を絶(た)てる人の勇気を  
私は持ち合せていないのだ  
死はいづくにぞ有るや

『独り (08/07)』

泣いている泣いている  
客のタバコの煙が中で  
客息の雑多な店内で  
会話と器(うつわ)が飛び交う中で  
泣いている泣いているその夜は

むせぶ泣く唄の響き  
去り行く独りの孤独  
たった独りたった独り  
今夜もむせぶ泣く唄声  
たった独りたった独り

泣いている泣いている  
客の笑いが渦巻く店のなかで  
人の夢の売と買いのなかで  
人々が眠の微睡(まどろ)むなかで  
泣いている泣いているその夜は

ピリー・ホリディーへ

『工事灯 (08/12)』

黄色い回転灯が  
クッル・クッル・クッル  
夜の暗黒が世界の中を  
くるくる回っている  
あれは警告灯の道しるべ

黄色の回転灯が  
くるくると回っている  
明るい白昼が世界の中を  
くるくると回っている  
あれは危険灯の道しるべ

クッル・クッル・クッルと  
昼も夜も毎日毎日  
クル・クル・クル・クル・クル  
黄色い黄色の道しるべ  
まわってまわって回っている

『花 (08/16)』

あわれなる  
お前の心よ  
何故にせつなく  
痛むのだ  
言葉に出せぬ  
悲しみを  
痛みで過ごす  
哀れ私の心よ

生きてせつない  
思いの数々  
花一匁(はないちもんめ)  
花一輪すら  
咲いてこの世に  
有るものを  
咲かずにあわれ  
お前の心よ

『漂い (08/16)』

どこへ行けばいいの!  
どこへ行けば生きられるの!

愛すらも喰われ  
希望に見離されて

どこへ行けば逢えるの!  
愛する人はどこにいるの!

愛すらも喰われ  
希望に見離されて

私の生きられる場所はどこな  
私の生きられる人はどこにいるの  
私にも優しい生きが欲しい  
優しく愛してくれる人が欲しい

世間を彷徨い歩いて  
蔑(さげす)みされて  
人々は私を  
抱いてはくれなかった

愛すらも喰われ

希望に見離されて

どこへ行けば逢えるの！  
愛する人はどこにいるの！

愛すらも喰われ  
希望に見離されて

どこへ行けばいいの！  
どこへ行けば生きられるの！

ピリー・ホリデーへ

『日陰 (08/20)』

陽の照りに出来た  
日陰(ひかげ)溜まり  
涼しくもあり  
心地好くも有り  
吹く風に我が想いを  
馳せれば自ずと湧き  
私は何も言うことなし

その樹木の葉の

ヒラヒラと陽に戯れ  
風に揺れ遊びしを眺め  
私は微睡(まどろ)み眠りにつく  
瞑(つむ)る瞼(まぶた)はほの痒く  
身はおとぎの世界にありて  
耳には小鳥たちの小声

風がほほをなで  
斑文様(まだらもんよう)が身を包む  
堆肥(たいひ)が落葉(らくえつ)の路(みち)は優しく  
敷(し)き占(し)めた宝(たから)の絨毯(じゅうたん)  
紅色(こうじき)・黄色(おうじき)・茶色(ちしき)……  
薄黄色(うすおうじき)・濃い真紅(こいまゐに)・淡い茶色(たんいぢしき)  
木漏れ陽(きもらいひ)に美しい

『灰色海原 (08/20)』

私の心と人生を  
空(むな)しく沈(しず)ませる  
灰色(こがし)の海原(うら)よ  
寄(よ)せては返(かへ)し  
何が楽しいのだ  
この私(わたし)を苦しめて

何が嬉しいのだ

たまには真珠(まゆ)の  
虹(にじ)を見せてくれても  
いいじゃないか  
黄金色(こがねいろ)に染(し)る夕(ゆ)の  
凧(たこ)の海原(うら)よ  
生きる歓喜(かんぎ)に  
満ちてもいいじゃないか

いつも灰色(こがし)に染(し)り  
空(そら)の境目(さかいめ)から  
寄(よ)せては却(かへ)って行く  
大海原(おほうら)の波(なみ)よ  
何が楽しくて寄(よ)せてくる  
何が嬉(うれ)しくて却(かへ)って行く  
この私(わたし)を苦しめて

『光(ひかり) (08/24)』

森(もり)の奥(おく)深(ふか)きへ  
幾(いく)千年(せんねん)の眠(ね)りと  
苔(こけ)の大地(だいち)へ

太陽の光は  
差込んでいる  
緑色の苔と静寂の  
冷暗の地は  
差込む一条の光に  
七色の虹に輝き  
キラリキラリと  
流れる水の糸

湧き水を手にすくい  
喉(のど)を潤(うる)おし  
静寂の大気を吸う  
生きて有ることを  
神へ感謝する  
この身は今となって  
神の存在を信じるのみ  
神に凡てをゆだね  
神のみ心を信じるのみ  
人で有ることの苦しみを  
一条の光が優しく包む

『叫び (08/24)』

火に包まれた家へ  
飛込もうとしている母親

泣き喚(わめ)きながら  
我が子を助けようと  
何人もの男を振りほどこうと  
その力は凄じい

火炎に包まれた家は  
柱が折れ倒れ  
屋根がしだいに落ち始め  
多くの見ている者の前で  
焼け崩れていく

やがて母親を押さえていた  
五人の男の力が弛(ゆる)む  
その場で泣き崩れる母親  
私はどうしても撮(と)れなかった  
人間の叫びと涙の彼女に  
カメラを向けることは出来なかった

『花火 (08/29)』

夜の空にあがって  
花咲く大輪の  
光り輝く色文様(もんよう)

煙の匂いに包まれて  
いつしか夢を  
見上げている

人の楽しい夢一輪  
夜の空へ咲いて  
儂(はかな)く消えました  
人の哀しい夢一輪  
夜の空に開いて  
淡く消えました

みんなの夢を夜空へと  
上げて咲かす大輪の  
届(とど)けと開く色模様  
見上げた先の天空で  
黙ってあまたの星々は  
キラキラ瞬(まばた)いている

『夜 (08/29)』

色とりどりの明るい  
カラフルな世界は  
様々な活動も終わって

漆黒(しつこく)の闇という  
暗黒の世界に隠されて  
一日の眠りにつく

人間が住む都会と言う  
ネオンが海の不夜城は  
闇に煌々(こうこう)と浮かび  
鬱(うつ)ろな若者たちの  
笑いと叫びの渦を巻く  
哀しい哀しい人の海

朝日が射(さ)して  
一日が始まるように  
笑いと叫びの哀しみも  
やがて日の光を迎える  
大きな花を咲かせるのも  
あなたなのだ！

End all 1994/08